

田中一村

栃木県生まれの日本画家。幼い頃から絵画に才能を発揮し、東京美術学校(現・東京藝術大学)に入学するも学校の指導方針や父の病気などで中退する。院展に出品作が落選したことが契機となり、中央画壇に絶望し、50歳のときに奄美大島へ移住。大島紬の工場などで働きながら、極貧のなか、奄美の自然を描き続けたが、生前は無名のまま画壇では全く評価されなかった。死後、新聞やテレビで作品が紹介されると、奄美の植物や鳥を鋭い観察力と画力で描いた作品が一躍脚光を浴び、「日本のゴッゲン」とも呼ばれるようになった。代表作は晩年に描いた「アダンの海辺」や「初夏の海に赤翡翠」などがある。